
輪廻～廻る運命の輪～

因幡 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻する運命の輪

【Nコード】

N6877L

【作者名】

因幡 悠

【あらすじ】

俺と亨が出会ったのも、運命だったのかもしれない

めくるめくる輪廻の世界へと、貴方を誘いましょう。

動き出した運命

俺と亨じゅんが出会ったのも、運命だったのかもしれない
棗なつめと亨の出会いなつめは小学三年生の時だった。

亨がその時は転校してきたばかりで浮いていて、最初に話しかけたのが棗だったのだ。

それから二人はすぐに仲良くなった。

それから八年経った高校の入学式の朝

「おばさん、棗二階？」

「そうよ。いつもごめんね、亨君」

「いやあ、好きでやってるから良いんですよ」

軽快なリズムで階段を駆け上がり、勢いよくドアを開けた。

「おゝい朝だぞー！今日は入学式だぁー！！」

いつもの声で棗の目が覚めた。

「おはよう亨」

「おはよう。そら、早く着替えろ！入学式から遅刻しちまうぞー！！」

「はいはい」

亨は六年前から欠かさず棗を起こしに来る。

今では家族の中に溶け込んで、たまに夕食も食べていたりするくらいだ。

「ワリい、待たせた」

「じゃあ行くか」

今日は高校の入学式がある。

棗は一人、果てない空を見上げた。

とうとう俺も高校生かあ

\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$

校長の話が大半の入学式が終わり、棗達は深い溜め息をついた。

「この後どうする？ 棗」

「取りあえず家で入学祝いしようぜ！」

「棗！ 亨！」

そんな二人の会話に入って来たのは、棗の幼なじみの水城みづぎだった。

「何々！？ 入学祝いすんの？ ウチも入れてよ！」

「しょうがねえなあ、じゃあ家に帰るか！」

そんな三人の前に一人の男が現れた。

その男は黒のスーツ姿で、黒縁のメガネをかけている。

「本日は高校ご入学おめでとうございます」

と、その男が言った。

棗達は何となく嫌な雰囲気を感じ、そこから立ち去ろうと足を進める。

すると、その男に呼び止められた。

「貴方達にプレゼントがあります」

その男は小さな箱を取り出した。

「入学祝いにあなた方の前世へ連れて行って差し上げましょう」

その男が呟く。

刹那 箱が開き、その中へと三人は吸い込まれた。

動き出した運命（後書き）

読めない漢字や要望などがありましたら、お気軽にどうぞ。
また、感想なども頂けるとありがたいです。

懐かしい景色

棗が目を覚ました時、辺りは全く見覚えのない景色へと変わっていた。

だが、そこは何故か懐かしく、居心地が良いと思えた。と、同時に、恐ろしいとも感じた。

“ここは・・・何処だ？”

見回しても、亨達の姿はない。

棗は、その『懐かしく恐ろしい場所』に一人、存在していた。

“取りあえず亨達を探そう”

棗は歩き続けたが、亨達どころか町すら見つからない。すると、頭の中に声が響いて来た。

『もう少し行くと、そこに町がある』

“お前は誰だ？”

『今は言う事を聞くんだ。直に分かる』

棗はその声に導かれながら、町にたどり着いた。

『ほら、着いただろ？』

頭の中の声が言った。

「ああ。でもお前は一体誰だ？何故俺の頭の中から・・・」

全てを聞く前に、邪魔が入った。

「おい！リヴィじゃないか！！お前生きてたのか！！」

そう言っただけでそうに走ってくる男を見ながら、棗は意味が分からなくなっていた。

“何を言ってるんだ？コイツ？て言うか誰だ？俺はリヴィなんて渾名はないし、死ぬような真似はしてないぞ？”

「久し振りだな、ルシナ」

“？今誰が喋ったんだ？もしかして・・・俺か！？”

そう、その言葉は紛れもなく棗の口から発せられたものだった。さっきから後ろに陰がある。

おそらくは亨が俺を見つけたのだろう。

そう思い、振り向いた。

だが振り向いた棗は、明らかに驚愕の表情を浮かべていた。

そこには、自分とそっくりの・・・いや、正確に言えば自分が20代前半位になるとこんな姿だろうと言う雰囲気の男性が立っていた。

「誰だ！お前！！」

「俺の名はリヴァインズ・アール。佐倉棗。お前の前世だよ」

そう言ったりヴァインズ・アールと言う男性は微笑み、その瞬間、棗は倒れた。

ただ、意識が朦朧としている中で思った事は、『この世界は何かおかしい』それ一つだった

千五百の罪

この世界に来て二度目の目覚め

その目覚めは一度目とは違い、賑やかなものだった。

「ねえねえ！リヴィが帰って来たんだって！！」

「そうそう！しかもナツメとかいう男の子も一緒だって！」

「

そんな女たちの声が聞こえる。

その声を聞いて、少し安心した。

しかし。

“ 今度は何処だ？ ”

棗は体を起こし、辺りを見回した。

「気がついた？ナツメ君」

横から聞こえる女の声。

「・・・あなたは誰ですか？」

棗がその声の主に問いかける。

「私はミレイナ・クライン。中澤水城ちゃんの前世で、リヴィの恋人よ。ミレイナって呼んでね」

「水城の前世・・・？」

「そ。リヴィ呼んでくるから待っててね」

棗の問いかけに答えたミレイナは、リヴィを呼びに行った。

暫くしてミレイナがリヴィと一緒に戻ってきた。

「やっと目が覚めたか。大変だったんだぞー、お前運ぶの」

リヴィが笑いながら言う。

「で、知りたい事は？」いきなり核心に触れられる。

確かに棗はこの世界がどうなっているのか。

何故自分がこの世界にいるのか。

分からない事が山程あった。

だから口から出た言葉。

「何故・・・？」

「それはまた漠然とした質問だなあ」

「何故・・・俺はこの世界にいる・・・？この世界は何なんだ？亨や水城は何処にいる？何故俺の前世であるお前が・・・リヴァインズ・アールが此処に存在する？何故・・・」

「ちよつと待つて」

リヴィがストップをかける。

「いきなり色んな事を聞かれても、全ては答えられないからさあ・・・順番に聞いてよ」

棗はコクリと頷いた。

「まず・・・この世界は何なんだ？」

棗が不安そうな面持ちで、再び問いかける。

「この世界はお前の前世だ」

リヴィの口から出た答えは、正直、理解出来ないものだった。だが、この状況では信じざるおえなかった。

「じゃあ、何で俺は此処にいる？」

「ああー、それは多分彼奴に聞いた方が早いなー」

「アイツ？」

棗は疑問の表情を浮かべる。

「棗さんは私がお連れしました。こちらの手違いで・・・ですがね」
そう言つて現れたのは、棗たちに『入学祝い』と称し、あの箱をくれた黒縁メガネの男だった。

「私は榊さかきと申します。その姿では初めまして」

「？あの・・・榊・・・さん？手違いってどうゆう意味で・・・？」

「ああ・・・本当は梶那亨だけを連れてくる予定だったんですが、面倒臭いんであなた達も一緒に連れて来ちゃったんですよ。手違いと言つよりは『面倒臭かつたから』の方が合っていますね」

“おいおい・・・そんな事で俺は連れて行かれたのかよ！”

棗は心の中で叫んだ。

だがしかし、一つ引つ掛かる所がある。

「何故・・・亨なんです？」

それは当然の疑問だった。

「彼は罪を犯したんですよ。正確には、『彼の前世』が犯した罪ですがね。それは棗さん、あなたにも関係が在ります。そして一番関係が在るのはリヴィさんです」

何を言っているのか、棗は分からなかった。

だが、リヴィの憎しみに歪む顔を見て、棗の心の何処かでも、一瞬、憎悪の念が生まれた。

「その亨の罪って何なんですか？」

「梶那亨は・・・いえ、亨の前世、ステイラム・ハーツは・・・リヴィさんの家族を含めた千五百人の人間を殺したんです」

聞いた瞬間、胸がざわついた。

リヴィの顔も怖くて見ることが出来ない。

「そんな・・・」

これから俺はどうしたら良いんだろう

夢の中の現実

事実を知らされた日から二日経ち、リヴィの様子も落ち着いて来た。

でも 話しかける勇気が出ない。

迷いながら棗が辺りを彷徨っていると、リヴィの方から話しかけて来た。

「何か気になる事があるのか？」

棗は行き成り話しかけて来たリヴィに一瞬戸惑い、恐る恐る聞いてみた。

「俺がこの世界にいるのは・・・前世と関係があるんだよね？」

「ああ、そうだよ」

「じゃあ・・・」

言い掛けて口を噤んだ。

こんな事を聞いてしまって、リヴィの傷を抉らないだろうか？

戸惑っている棗の様子を横で見ていたリヴィが『何を聞きたいかは分かってる』と、棗の頭の中に直に伝えてきた。

「俺とステイラム・ハーツの事だろう？」

棗は黙って頷いた。

「・・・俺とステイとミレイナは幼馴染みだったんだ・・・。特に俺とステイは仲が良くて、一番の親友だった。だが・・・」

そこまで話すとリヴィは一旦話を止めた。

とても辛そうな表情をしている。

そして憎悪の念も見取れる。

何故だかは分からないが、棗も辛くなった。

暫くしてからリヴィが再び口を開いた。

「・・・あいつは、ある日突然俺の両親を殺したんだ」

柵から話を聞かされ知ってはいたが、リヴィの口から聞くとやはり重みが違う。

感情が溢れる。

「・・・っ・・・うつ」

いつの間にか棗の瞳から涙が零れ落ちていた。

「・・・何で・・・お前が泣くんだよ」

無理な笑みを浮かべ、リヴィが棗に言った。

「わか・・・ら・・・ないっ・・・。でもっ・・・悲しいんだよ・・・」

「

涙を拭った棗は部屋から出て行こうとした。

「何処行くんだ？」

「・・・もう寝る・・・」

その夜、棗は夢を見た。

それはリヴィが子供の時の夢だった。

『リヴィー、ミレイナー、遊ぼうよぉ』

“何だこの夢・・・。誰だ・・・この声は・・・”

『誰だ？お前は？』

『何言ってるんだよ？リヴィ。ステイーだよ？』

“ステイー！？”

【リヴィ、ステイー、お待たせ】

『ミレイナさん？』

【やだぁ～なあに？さん付けするなんて】

『今日のリヴィ、少し可笑しいんだよ』

“そうか・・・俺は夢の中でリヴィになっているんだ”

【それより遊ぼうよぉー】

『あっ・・・うん』

『じゃあ鬼ごっこな！リヴィが鬼』

【わ～い逃げろぉ～】

『あっ！ステイー！！』

叫んだ瞬間、暗闇に包まれ、闇が消えた時には棗は血塗られた部屋にいた。

噎せ返るような血の匂い。

その場にいるだけで息が詰まるような圧迫感。

棗はこの場所が何処だか把握出来た。

リヴィの家だ。

夢とは思えない程の生々しい感覚に吐き気までも覚えた。

陰が写る。

そこに いる。

『それ』の顔がぼやけて見えないが、棗は顔を上げ問う。

『何故こんな事を・・・』

すると笑みを浮かべ『それ』が言う。

『もう、何もかも飽きたんだ』

『つつ・・・!』

心に憎悪の念が広がっていく。

『だから全て 』

なんだ？声が聞こえない？

そう感じた時にはもう遅く、今度は出口のない闇へと引きずり込まれた。

そこには子供の姿のリヴィが立っていた。

憎しみの記憶

呆氣に取られている棗を見上げながら子供の姿のリヴィが嗤い、
『どうしたの？オニイチャン』と尋ねる。

リヴィは俺が誰だか分からないのか？

「俺の事が分からないのか？」

『分かるヨ、棗』

そう答えた瞬間　リヴィは消えた。

そして背後から声が聞こえた。

金縛りにあつたように体が動かない。

『ただ、棗は分からない事が沢山あるでシヨ？』

「ああ」

『何で分からないのかナ？』

「そんな事俺に聞かれても・・・！」

『じゃあ教えてあげるヨ。棗はね、分からないんじゃないんじやなくて思い出せない・・・ううん、思い出したくないんだ』

思い出したくない？

何故思い出したくないのか、棗には分からない。

「どうしたら思い出せる？」

するといつの間にかリヴィが目の前に立っていた。

『良イノ？思イ出シテシマツテ』

優しい口調の様で冷たい声。

気を抜いたら何かに吞まれる様な不安を煽る。

『其レガドンナニ辛イ現実デ有ツテモ、後悔シナイ？血塗ラレタ過去ヲ知ツテシマツテ苦シクナラナイ？』

「ああ。俺は知らなければいけないんだ」

リヴィがニヤリと不気味な笑みを零す。

『じゃあ付いておいでヨ。見せてアゲル』

そこまで言つと辺りの雰囲気が一気に変わった。

『最高の夢をネ』
本当の底知れぬ闇。

怖イ

「うあああああつ!!!」

ベットから飛び起きるとリヴィが心配そうな表情で棗の隣にいた。

「リヴィ」

「大丈夫か？酷く魘されていたけど・・・？」

「とても怖いモノを見た・・・。おぞましい記憶を・・・」

恐怖に震える棗を見て、リヴィが「そうか・・・悪いな」と呟いた。

「何でリヴィが謝るんだよ？」

するとリヴィは申し訳なさそうな顔をして言う。

「それは・・・俺のせいみたいだなもんなんだ・・・。一時、俺は憎しみに染まった記憶が強かった・・・。そして多かれ少なかれお前の中には俺の記憶の欠片がある。勿論、憎しみの記憶もな・・・。それがお前に同調したんだろう・・・」

「・・・そっか」

すうつと心の中の疑問が消えていった。

だからここに来たとき、懐かしいと感じ、榊に事実を知らされ、憎しみに駆られたのか。

窓から陽が差し込む。

「もう、朝だな。立てるか？」

リヴィが手を差し出す。

「ああ。もう大丈夫だ」

\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$

それから昼下がりになった
「ところで、さあ。リヴィ」

「ん？何だ？」

リヴィが棗の言葉に振り返る。

「何でリヴィは最初、俺の中にいたんだ？」

暫しの沈黙。

「うゝん……。じゃあめんどくさいけど説明すつかなあ」

そう言つて面倒臭そうにリヴィは話し始めた。

「まずは輪廻の関係性からだ。輪廻の意味は分かるよな？」

「……。うゝん？」

真面目に分からなかった。

「分かるよ……。ナ？」

リヴィの顔が怖い。

「リヴィさゝん。顔が怖いよおゝ。てか、真面目に分からないし！」

「はああああゝ」

「……。そんな明白に溜息吐かなくても……」

「りんね【輪廻】

〔名・自サ変〕回転する車輪がきわまりないように、衆生が死後、

迷妄の世界である三界・六道の間で生死をくり返すこと。仏教の基

本概念。流転。……。デスケド解リマシタ？」

怖い怖い怖い怖い怖い！！

「解りました！！笑顔が怖いです！リヴィさん！！！」

「……。』」

「ハハッ！おまつ、顔引き攣りすぎっ！！ブハッ！」

リヴィが突然大笑いしだした。

「何でそんな笑うんだよ！」

「悪イ、悪イ。でも」

リヴィはほんの少し真面目な顔をした。

「こっからが本番だ」

ゴクツ　　棗は息を呑んだ。

「だけど……。疲れたから今日はお終い」

「そんな終わり方ありかよー！！！！！！」

そんなワケでリヴィの気まぐれによって話はお預けになったのである

暖かい場所

「リヴィー！今日こそちゃんと教えてくれよー！」

「ううー、めんどくさい……」

あれから随分経ったがリヴィは面倒臭がつて教えてくれない。

「だって長いんだぞー！下手したらそれで二十四時間潰れ兼ねない！」

なんて面倒くさい大人だろうか。

棗がそう思った時、ミレイナがやってきた。

静かだが怒りを含んだ声で。

「リヴィ、貴方面倒くさい大人にだけはならないでね？」

その言葉が聞こえるとリヴィは素早く部屋から出てきた。

「やあ棗くん。お待たせ」

その姿を見た棗は「……バカっぽい」と言い捨てる。

「んー……じゃあ話しますよっ……！」

『はい』

返事が二重。

違和感を感じてリヴィが後ろを振り返る。

「で、ミレイナは何でいるんだ？」

そこにいたミレイナに問い掛ける。

「私も聞きたいからよ？」

真面目な答えが返ってきた。

半分無視しながら話を再開する。

「……んじゃ、輪廻については解っただろうから、次は記憶の関係からだな」

そう言つて話し始めるリヴィ。

「人は誰しも前世の記憶を持っている。だから初めてい行った場所でも懐かしい雰囲気を感じたりする事がある」

「あっ！確かに一、二回そんな事あったなあ」

話を続ける。

「そしてお前は前世の因果により、まあ殆ど偶然みたいな形でこの世界にやって来た。その時お前の中にあつた前世の記憶が干渉して、俺の人格を目覚めさせた。だから頭の中から声が聞こえたんだ。省略するとこんな感じだな」

そして最後に、「ミレイナ達も同じくだ」と付け足した。

「だから俺たちは本当だと、もう死んでいたんだ」

え？

「でも神さんが調整して今まで生きていた事にしてくれたの」

「・・・そう、なんだ」

「まあでも暗い話は抜きにして、色々分かったか？」

リヴィが励ますように問いかけた。

「うん。ありがとう」

微笑む。

穏やかで平和な時間が流れていた。

「あとは俺の友達とか紹介するから」

暖かい。

そんな時だった。

「あら、そう言えば水城ちゃん。今こつちの世界に来たみたい」

と、ミレイナが言った。

「えっ！？でも、水城は俺と一緒に飛ばされたのに何で今更？」

「多分気を失つてて、時間断層に引つ掛かってたんじゃないか？気を失つてると時間断層から出られないから」

「じゃあ私、水城ちゃんを迎えに行つて来るわね！近くに落ちたみたいだから、直ぐに戻るわ」

そう言うのと、ミレイナはスッと消えてしまった。それから一分後。ミレイナが水城を連れて戻つて来た。

「だだいま」

嬉しそうなミレイナの隣で不安げな表情を浮かべていた水城が棗の姿を見て、走り寄り、抱きついた。

「水城、お帰り」

今にも泣きそうな水城の頭を撫でながら、棗が微笑んだ。

「棗え、怖かったよお」

泣きじゃくる水城。

「もう、大丈夫だからな」

再び頭を撫でている棗の表情は安堵に満ちていた。

晩聖節

水城がこちらの世界に来てからは、平和な時が流れた。

「水城ちゃん、そっちのジャム取ってくれるー？」

「はい」

今日はHalloweenで水城とミレイナが菓子作りをしている。

「久しぶりだなー、ミレイナの菓子」

リヴィは楽しそうに話している。

「なあ棗。水城ちゃんて料理上手いの？」

「うん」

「ふうん。じゃあ水城ちゃんてお前の彼女なの？」

「違う。てか、どこからそんな発想が出てくるんだ」

「だって俺とミレイナが恋人なんだから、お前等が恋人同士であっても可笑しくないだろ？前世だし」

「そんな感情は無いと思うよ。俺たちは幼馴染みだし」

「そりゃ俺たちだって同じさ。でも恋人になった」

「リヴィ達と俺達は違うだろ」

「まあなあ」

こんな話を話していて、何が楽しいのだろうと棗は思った。

「楽しいも何も、この時間を大切にしなくちゃな」

「おまつ！心読んだな！」

「まあな。そんなくらい易い」

「でも……」

“この時間を大切にする”

って、どうゆう意味だ？

「平和な時間は限られている。って事だよ。お前等の世界では命が失われ、事件が起きたとしても、テレビの中での出来事であって、他人事のように思っている。でもこの世界ではお前等の世界より死が身近にある。それはお前も分かってるだろ？だから平和な時間を大切にしなきゃな。第一にこの平和だって仮初めに過ぎない」

「分かってる……でも分からない」

「良しさ……。嫌でも後で実感する……。ま、Halloweenを楽しもうぜ！」

こうして棗達が話している間に菓子が出来上がった。

「棗くん、リヴィー、出来たわよー!!」

『はい』

応えたのは棗とリヴィーではなく、二人の男性だった。

「おお！クラウド達来てたのか!!」

『よお!』

棗の顔には「？」が浮かんでいる。

「じゃあ棗、こいつらも後で紹介すつから」

「分かった」

棗が応えるとほぼ同時に、奥で準備の出来た水城とミレイナが「早く!」と、少し怒鳴り気味に言う。

「あつ！ゴメン」

棗達は大急ぎで走って行った。

\$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$

『せーの、Happy Halloween』

大きなかけ声でHalloween partyが始まった。

「じゃあ、お待ちかねの二人の紹介な！」

そう言つてリヴィがさっきの二人を指差した。

「まずは兄のルシナ・クラウド。こいつは俺と棗がこつちの世界に
来た時に最初に会ったやつだ」

「それとこつちは弟のルシン・クラウド。ルシナの弟な。こいつは
初対面だな」

兄のルシナは切れ長のスカイブルーの瞳。

背も高い。

薄水色の長い髪を後ろで一つに束ねているが、鬱陶しい感じはなく、
むしろ爽やかな雰囲気だ。

弟のルシンも、切れ長のエメラルドグリーンの瞳で長身。

薄水色の長い髪は束ねてはいないが、手入れが行き届いている為か、
兄同様、爽やかな雰囲気を醸し出している。

「因みにこいつら双子だぜ。一卵性のな」

確かにルシナとルシンは瓜二つだった。

『これから宜しくな、棗！』

二人が手を差し出す。

「宜しく」

棗は笑いながら握手をした。

「こいつら言い奴だから仲良くしとくと良いぞ」

「しかもモテモテよ」

皆の笑い声が響く。

棗はこの時がずっと続けば良いと思った。

その先に待っている運命も知らずに
。

平和って・・・ナニ？

リヴィが言った“この時間を大切にする”という言葉。

その意味が棗はやっと理解出来た。

夢か現実かは分からない。

また夢なのだろうか？

朝起きたら世界が血色に染まっている。

こんな光景を一体誰が見ただろう？

町の者は皆死に絶え、自らも傷を負っている。

すぐ傍には男女の骸。

誰だか分からない2人の姿に父と母が重なる。

『父さんっ！！母さんっ！！』

棗自身が悲しい訳ではなく、ましてや本当の父親でも母親でもない。
だが、感情の昂りを抑えられない。

誰か助けてくれ！

気が狂ってしまうっ！

心から助けを求めた。

自分の後ろに気配を感じた。

あの嫌な気配。

“あいつが・・・スティーラム・ハーツが居る！”

動けぬまま風きり音がした。

“ヤバイっつ！”

そのまま棗は気を失った。

気を失ったまま、とても長い時間が経ったのが分かった。

『・・・め・・・！・・・つめ！棗！！』

リヴィ達が棗の周りに立ち、心配そうに覗き込んでいた。

「良かったわあゝ・・・私たちがいくら呼んでも起きないんだもの。心配したのよ？」

「何か・・・あつたのか？棗」

リヴィが問いかける。

「また・・・恐ろしい夢・・・」

「どんな夢だった・・・？」

「言い表せないんだっ・・・。なんて言って良いのか」

するとリヴィが棗の額に手を当てた。

「ちょっと頭の中見るぞ」

「そんな事出来んの？」

「ああ。この前楸に教えてもらっただ。あつ！でも二種類やり方があるケドどうする？」

「二種類？」

「一つは俺が頭ン中見なので、もう一つは俺が棗と一体化すんの。どっち？」

棗は少しも躊躇う事無く即答した。

「頭ン中見る方！だってさあ！リヴィと俺が一体化するなんて気持ち悪すぎじゃなかあ！」

「・・・そうかい」

苛立ちを含んだ表情で言った。

「でも・・・多分お前は気持ち悪いだろうが、俺と一体化する方が恐怖は少ないぞ」

「どういう事だ？」

リヴィがフウと溜め息をつく。

「俺とお前が一体化する場合は、まあ、お前は気持ち悪いだろうが、俺だけが記憶を探るから、恐ろしい夢を再び見なくて済む。だが、頭の中を見る場合は記憶を呼び起こして、俺とお前の両方が恐ろしい夢を見ることになる。俺は恐らく自分の過去だろうから、今更何とも思わないが、お前はもう二度と怖い思いはしたくはないだろう？少しの不快感と大幅な恐怖。お前ならどちらが良い？」

棗は酷く戸惑った。

あの恐ろしい夢をもう一度
体中を寒気が奔る。

恐怖が込み上げてくる。

「嫌だ……。あの・・恐ろしい夢はもう見たくない……。！リ
ヴィ・・・頼む」

「分かった。少し眠ってろ」

そうリヴィが言うと、意識が遠退いた。

『これでよし』

棗とリヴィが一致した。

『……。でさ、ミレイナ達はいつまで見てるつもりだ？』

『だって棗が心配じゃんか』』

とクラウド兄弟が言った。

『集中できん！外出てろ！！』

そう言われ、ミレイナ達は外に追い出された。

『じゃあ、静かになったことだし……。』

と言って、意識を集中し始めた。

リヴィの中に記憶が流れ込む。

あの忌々しい記憶が

“自分の過去だろうから、今更何とも思わない”

そう言いはしたが、やはり辛いものがある。

『はぁ・・・とりあえず終了』

額から汗が滲み出てくる。

「リヴィ・・・もう入っても良い？」

ミレイナがドアの外から呼びかけてきた。

「もう良い。終わったから」

「棗君、いつ目を覚ます？」

「もう一、二分したら起きんだろ」

それから一、二分して棗は体を起こした。

「終わったよ、棗。あれは多分・・・ステイーに町を襲われた時の記憶だろう」

「そうか、、、」

棗の表情が少し、曇っている。

「どうした？棗」

「・・・リヴィは・・・今まであんな重い過去を背負って来たのか？
あんなに恐ろしい記憶を・・・」

「・・・・・・・・そうだ・・・」

「俺、何も分かつちやいなかったんだ・・・」

「良いんだよ。棗はほんとなら知らないままで良いことだったんだから」

優しい言葉に安堵を覚える。

「でも・・・平和な時間はやっぱり長くは続かないんだ・・・」

リヴィが呟いた。

『チリン、チリーン』

遠くで鈴の音が響く。

「ほら、お前にも何故か・・・分かるだろ？」

言っている事の理解は出来る。

「この鈴の音は、亨がいつも持っている鈴の音だ」

「でも、この鈴の音、二重に響いてるぜ？しかもこの鈴はスティーも持ってる」

胸騒ぎがして、急いで外に飛び出した。

その瞳に映る真実を受け止めきれないまま

戸惑いの再会

瞳に映った“セカイ”はさっきまでの賑やかな明るい“世界”とは全く違う、棗の夢が実際に現れたような光景だった。

皆が悲鳴を漏らす、まるで地獄絵図の様なセカイそこに棗とリヴィイは呆然と立っていた。

空までもが真紅に染まったセカイ。

「何なんだ・・・これは！」

思わずリヴィイの口から悲鳴にも似た叫びが迸る。

「何ってそりゃあ・・・」

チリン、と言う鈴の音と共に声が聞こえてくる。憎悪で胸の奥が掻きまかれるような感覚。

この感覚は

『ステイー・・・！』

「久しぶりだなあ・・・リヴィイ。何年振りかあ？ほら、お前も挨拶しろよ」

そう言うステイーは自分の後ろに目を遣った。

「亨！？」

そこに在ったのは紛れもない亨の姿。

「初めましてリヴィさん。逢いたかったよ・・・棗・・・」

「亨・・・!」

その時、大きな爆発音と共に真紅の空に亀裂が走った。

「リヴィさん! 棗さん!」

亀裂の間から顔を覗かせたのは榊だった。

「榊さん!」

「榊、どうなってるんだ!? これは!」

「すみません。こちら側のミスで侵入を許してしまいました」

榊が深々と頭を下げる。

「今すぐ取り押さえますので、少し下がっていて下さい」

そう言うが早いか、スティーと亨が取り押さえられた。

「つたく、折角の再会を台無しにしゃがって」

ぼそぼそと呟いているスティーを尻目に榊がもう一度頭を下げた。

「本当に申し訳ありませんでした・・・。なんとお詫びをして良いのか・・・」

「・・・いえ・・・それより榊さん、亨と話すことは出来ないんです

か？」

棗が問いかける。

「難しいでしょうし、危険です。棗さんを危険な目に遭わせるわけにはいきませんから……」

「大丈夫です。亨は危害を加える存在じゃあないですから」

「でも……」

一瞬戸惑ったようにリヴィと顔を見合わせた榊は、リヴィが首を縦に振るのを確認してから棗に言った。

「良いでしょう。しかし、危険だと感じたら、直ぐに戻って来て下さい。これが梶那 亨との面会の絶対条件です」

「はい」

返事をしてから走り出した。

「亨……少し話し出来ないかな？」

「……良いよ。でも別の場所で」

「うん。……榊さん、別の場所に移ります」

榊にすれ違いざまに知らせた。

「はい……」

未だ真紅の残るセカイの中を進み、二人はリヴィの家へと入って行った。

「改めて棗。逢いたかったよ」

「うん・・・」

「今までずっとここにいたのか？」

「ああ・・・」

「そっか」

亨、何だか雰囲気が違う。

気のせいかな？

別人みたいだ

棗が違和感を感じるのも無理はなかった。

亨ならこんな状況に立たされていればすぐに助けを求めるはずだ。

「・・・なあ、亨。お前は・・・誰だ？」

「はっ？」

困惑の表情を浮かべる亨。
だが明らかに動揺している。

「何言ってるんだよ、なっ・・・」

「だからお前は誰だって聞いているんだよ」

「俺は俺だよ？」

「いや、違う……」

二人の間に沈黙が続いた。

「勘の鋭い奴だよなあー、佐倉 棗。俺が居ることはあいつらだつて気付かなかつたのに」

「……やっぱり貴方だったんですね。ステイラム・ハーツさん」

「ああ。あつちのは人形。偽物だ。^{ダミー}今頃あいつらもそれに気付いてるだろうよ」

その頃、サラサラと崩れ散っていくダミー人形を目の前にして、リヴィ達は驚愕の表情を浮かべていた。

「リヴィさん、これは……？」

「棗が危ない！！急ぐぞ榊！」

\$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$

「リヴィ達、こちらに向かつてるみたいだよ」

「そんな事はどうでも良い。亨は何処だ！」

「……だから目の前にいるじゃないか」

「何言ってる！お前は」

その時棗はふと気が付いた。
実体化の方法は一つではない事に

「と言うことは、お前が本当に亨・・・？」

胎動

「お前が・・・亨？」

「やつと気付いたんだ？実体化の方法が一つじゃないこと」

「・・・」

その時棗の頭には、以前リヴィに言われた事が蘇っていた。

\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$

「実体化の方法は様々だ。勿論目に見えないものもある。最初に言
つとくけど、身体の元、つまり棗が《オリジナル》で、借りてる側、
俺が《コピー》って呼ばれるからな。じゃ、話の続き。まずは二人
つまり、俺とお前が同時に存在するタイプ。次に一人。これは一体
化して、どちらかが表に出るタイプ。だから頭の中から直に話せる。
どちらが表に出ても大丈夫。その次は幽体。オリジナルこれだと元の方しか表
には出ない。オリジナルは幽体にはなれないからな。つまりは俺が
幽体なんだよな、悲しくも・・・で、あとまあ色々あるけど、
主なのは解つただろ？」

なんて長い話を聞いた。

「そんな馬鹿な・・・」

「亨は中で寝てるよ。呼んでも良いが、気絶してるよ?」

「・・・何が目的なんだ？」

「お前等に危害を加えるつもりはないよ。あの真紅の空だって幻だ。俺は只、リヴィに会いに來ただけさ」

「だったら何故！？リヴィが苦しむ様な事を！親友だったんでしょう！？」

その時辺りの雰囲気が一気に変わった。
冷たい闇。

以前見た夢の様に、恐ろしさを纏う。

「お前に・・・お前如きに何が分かる・・・！俺の痛みも、アイツの苦しみも知らないお前が！」

背筋に寒氣走る。

「ツクク・・・俺を怒らせない方が良いよ。俺は氣紛れだから、直ぐに氣が変わるかも知れないからね？」

遠くから足音が聞こえる。

「そろそろ潮時か・・・」

勢いよくドアを開け、入ってきたのはリヴィだった。

「棗！大丈夫か！？」

そしてステイーを睨みつける。

「お前・・・どう言うつもりだ！」

「別に危害なんか加えちゃいないさ。話をしていただけだろ？」

「つつ・・・」

「じゃあなリヴィ、佐倉 棗。今度は亨に会えると良いなあ？」

そい言つて去ろうとするスティーの前に榊が立ちはだかる。

「待ちなさい、スティーラム・ハーツ。逃がしませんよ・・・。
貴方を拘束します」

「クツ！榊い・・・！お前にゃ俺は捕まえられんよお！」

「何を言います！」

「ああーばよ」

「待ちなさ・・・！！」

その時にはもうスティーの姿は霧となつて消えていた。

「申し訳ありません・・・！私の不手際で棗さんを危険な目に遭わせてしまつて・・・。Sandy dollの存在にも気付かずに・・・！あの二人の特殊能力がそれ《Sandy doll》だと知っていたのに・・・！！」

「大丈夫ですよ。危ないと言つたつて危害は加えられてませんからね？だから頭を上げて下さい」

「そーだよ榊。お前のせいじゃない。俺だっ一緒^{いっしょ}にいたが分からなかった」

「でもこのままではいつ怪我人が出るか分かりません。榊^{しきみ}を呼びます」

「榊を呼ぶ・・・か。事は重大だなあ？」

「えっ！？それって誰ですか？」

「榊・・・突っ込むのはそこじゃない！」

「でも・・・」

そう言っリヴィが天を仰ぐ。

「榊を呼ぶたあ、一刻を争う事態^{じたい}ってことか・・・」

束の間の休息

「なあ・・・お前気絶なんかしちやいなかっただろ？俺が呼んでやったのに何故出て来ない？亨」

そう言つてステイラム・ハーツは空き家の中の人影に問いかける。

「五月蠅い・・・。」

返答をしたのは棗の親友と呼べる存在・梶那 亨だった。

「俺が出ても棗と水城を混乱させるだけだ・・・。それに出たら可笑しくなつちまうのは俺の方だ」

そう言つた亨に対し、ステイは不敵な笑みを浮かべる。

「かもな？」

「・・・お前も放つてはおけない」

「そうかい？でもよお、どうすんだよ？佐倉 棗は？お前の大切な親友なんだろ？失うぜ・・・俺みたいに」

真剣な面持ちの亨に少し呆れたような表情でステイが言う。

「だとしても敵に回る。それがアイツ等の為なら・・・仕方ない」

「・・・お前にそんな考えを持たせたのは、俺の記憶の欠片を見たからか？」

“申し訳ない” そんな表情。

「確かにステイーに影響を受けたかもしれない。でも敵になるかを決めるのは、俺のステイラム・ハーツの部分ではなく、梶那 亨の部分だ」

強い意志を掲げる瞳。

後悔など、微塵もない。

「お前のそうゆう所、俺にそっくりだな？」

馬鹿だと言って微笑むステイーの顔には、孤独から抜け出した安心感が滲み出ていた。

「でも・・・だから知っている・・・」

亨の少し切ない表情。

「・・・お前の苦しみ、痛み、悲しみ、絶望、焦燥、惑い、全ての記憶、想い。嫌になるよな、こんな事。本当は誰よりも平和を望んでいるのに・・・」

注意して聞かなければ聞き取れない程の小さな声。

泣きだしそうな声。

その様子を見ながらステイーが言った。

「後悔しても遅えんだ。今更戻れないし、止まらない。進むしかない」

力強い声音に掠れそうな声音は救われた。

「そうだな・・・どんなに恨まれようと、俺たちの真意を知る者はいないんだしな」

悲しい事だよな、と二人で口にした後、亨とスティーは空き家を後にした。

\$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$

ざくざくと砂を踏む音が遠くから聞こえてくる。

「俺を呼ばなきゃいけないなんて、何やってんだよ榊は・・・」

一人砂の上を歩きながら、落胆の表情を浮かべる者がいた。

「でも兎に角あつちに着かなきゃな・・・嗚呼、面倒くさい！でも行かなきゃ榊怒るもんなぁー」

よし、もう一踏ん張り。

そんな事を思いながら、男は歩いて行く。
まだ遠い道程を

\$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$

「あゝあゝ、遅い！！何故密はこんなに到着が遅いんですか！！」
「！」

苛立ちを隠せない様子で彷徨く榊。

「まあまあ榊。本部が遠いんだから仕方ないじゃないか？」

リヴィが宥める。
が、無駄だった。

「違います！ 柵はいつも徒歩で来るから遅いんですよ！？ もっと有効な移動手段があるのに！」

「ごめんな榊。俺間違えてたよ」

「分かれば良いんですよ、リヴィさん」

榊がにこやかに応える。

次の瞬間、勢い良くドアを開け放ち入ってきたのは柵だった。なんて間の悪い男だろうか。

榊に鉄拳制裁を喰らったのは言うまでもない。

「痛いなあー！ 何すんだよ榊！！」

「何故か分からないのか？」

ゆらりと榊の体が揺らぐ。

立ち込める黒いオーラ。

「うん……。ごめん。分かってる。許して？」

「嫌だ」

この状況をどうしたものか？

リヴィは考えていた。

そして思い付かなかった。

「…………あのさ、この状況下に置かれてる俺はどうしたら良いの？」

柷は未だ黒いオーラを放ちながら微笑んだ。
飽くまで丁寧な口調で。

「すみませんリヴィさん。お手数ですが柷さんをお呼び立てして下さい。その間に然るべき対処をしておきますので」

「……………うん」

それから暫くしてリヴィが柷を連れて戻ってきた。

「悪い柷、遅くな」

そこには明らかに落ち込んだ柷がいた。

「すみません柷さん。お呼び立てしてしまつて。」

柷が柷に軽く会釈をする。

「いえ。そちらが柷さんですか？」

「ええ。紹介します。こちら私の双子の兄で、機関のトップの一人・柷です。いつもは頼りないですけど一応強いので安心して下さい」

するといつの間にか回復していた柷が柷の隣にいた。

「君が柷くん？初めまして、柷です」

満面の笑みを浮かべ、棗に手を差し出す櫛。

「宜しく願います」

棗も笑みを浮かべた。

「リヴィも久しぶり。お前が死んで以来会ってないもんなあ？」

「そうだな」

「んで、今はどんな状況なんだ？」

「ああ。今は」

櫛の話が長いので早送り

「とゆう状況なんだ」

「そうか。到頭ステイが、ねえ」

棗とリヴィもコクリと頷く。

「ところで」

更に真剣な面持ちで、櫛が切り出す。

「何で櫛って俺にだけ微妙にタメなの？」

何故そこでその話題なのか。と、一同は固唾を呑む。

「兄弟だから。密に敬語を使う意味がない。価値がない。殴ろうか？」

「いまサラッと酷いこと言った。価値がないとか、殴ろうか？とか・・・」

「ええ。当たり前です。」

その次の瞬間　ドアが勢い良く開いた。

「密さんか来てるって本当！？」

入ってきたのはミレイナだった。

「おー！ミレイナ久しぶり！元気　では無かったな」

少し苦笑いを浮かべる密。

「ねえ、そう言えばリヴィ」

棗が少し離れた場所でリヴィに話し掛ける。

「嫌だったら答えなくても良いんだけど」

「うん」

「どうしてリヴィとミレイナさんで死んだの？」

「あーそれな。いやあな、ステイーを搜索してる時に不意打ちでス

ティーの当時の部下達に襲われてな」

「そっか」

「それより明日は大変だぞ！多分皆で密の歓迎会やんだろな。榊の時はバタバタしてたから榊も一緒に」

「そんな事してる暇あんの？」

「潤滑油だよ。潤滑油。お前も手伝えよ！」

「ったくしょうがないな」

この日は束の間の休戦日。

皆が笑い合う穏やかな日々だった。

不協和音

「ねえー！そっちのお皿取って！棗！！」

水城達が料理の準備をしている。

「何か・・・デジャヴー」

棗は一人そんな事を考えていた。

「てかりヴィ、潤滑油とか言ってたけど、普通にゴロゴロしてた方が楽な気がする」

『俺等もそう思う』

「なっ・・・！？ルシナさん、ルシンさん！？」

『はあい』

そこには笑顔のクラウドス兄弟が立っていた。

「なんかさあー、楽しいのは好きだけど流石に疲れたー・・・」

とルシナ。

「だよなあー、色々と疲れてるから、休みたい」

とルシン。

すると後ろからぬうと手が伸びて、クラウドス兄弟の首根っこを掴ん

だ。

『なあっ!?!』

「お前等少しは手伝えコラア! 棗もな!」

リヴィだ。

リヴィ、血管浮いてるよー。

その言葉を胸に収納し、リヴィの言葉に従った。

何故ならクラウス達が必死にジェスチャーで『逆らうとヤバイ』と伝えてきたからである。

「まあ、どっちにしろ面倒くさいんだからいつかな」

そう呟いて後を追った。

\$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$

リヴィに言われて料理をしていると、水城が俺を見ているのに気付いた。

何で見ているんだろう?

不思議に思った。

「……なあ水城、何で俺の事さっきからずっと見てるの?」

思わず聞いてしまった。

「えっ……! やっ、り料理上手いなあと思って、さ」

「まあ、ちっさい時から教え込まれてたからな。この程度だったら

別に。水城も上手いじゃんか」

「そうかな？」

水城は嬉しそうに笑いながら、料理を運んで行った。

「ありゃあお前の事好きだな」

「えっ？」

行き成りの声に後ろを振り向く。

「何だリヴィカ」

「何だとは何だよお！お前等さつき愚痴ってただろ？」

「えっ、バレた？」

「当たり前だ」

リヴィは少し怒ったような素振りをして見せた。

「てかさあ、気のせいかも知ないけど、前にもこんな事あったよな？」

「うん？ああ、Halloweenパーティーの時か？」

何で疑問系なんだよ。

「そっか！多分そうだと思う。で、何で今日パーティーしなきゃな

んないの？折角の貴重な休みなのに・・・」

「だからこの時間を大切につて前にも言っただろ？」

「？」

疑問符疑問符・・・。

「俺は一回死んだから分かるんだよ・・・。時の大切さ、どんなに偉いかが。やりたい事が沢山あった。彼奴にも痛みを分からせてやりたかったのに・・・。だから時間は大切に、有効に使わなきゃならないんだ。無駄にしたら勿体ないだろ？」

「・・・そうか」

生きた証を残さなくちゃならないんだ。

「そうさ！だから」

遠くでミレイナ達が二人を呼んでいる。

「今日もパーティーって事さ！！」

明るい声が響く響く。

その響きはやがて様々に入り交じり、不協和音となる

全ての元凶

何故？ナゼ？なぜ？

分からない。

理解できない。

昨日まで穏やかだったのに。

穏やかだった 筈なのに。

何故今はこんなにも荒れている？

あのパーティーの後、亨が来なければ。

彼奴等が来なければ良かったのに。

何故今は皆怪我を負っている？

全ては彼奴等のせい。

「何でこんな事をするんだ！」

叫んでも只、嘲笑するのみ。

彼奴等さえ来なければ

\$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$

昨日までは休戦日。

皆一様に団欒を満喫していた。

そして次の日、行き成り彼奴等が現れた。

彼奴等は言った。

『やるならば最後まで』と。

彼奴等は嘲り、笑った。

血の海の中で。

彼奴等は鳴いた。

『心が痛い』と。

何故泣く？

何故お前等が傷付く？

俺には解らない。

泣く位なら何故傷付ける？

呆けていた俺の意識は、リヴィによって現実へと引き戻された。

「棗！呆けてる場合じゃない！！早く俺の後ろに回れッ！」

首根っこをグイッと引っ張られ、リヴィの後ろに回された。

直後襲い来る衝撃。

戦いの最中だった。

「砂っ！？」

「知ってるだろ！？Sandy dollだよ！！」

額に汗を滲ませ、怒鳴り気味に言う。

「お前も早く応戦しろ！！」

困った・・・。

「俺は特殊能力は使えないぞ！？」

特殊能力についても、以前リヴィから教わった。

「この世界に住まう者は、誰しも特殊能力を持つ。だがそれはこの世界の住民特有のものであり、前世・来世は関係しない」

確かそう教えてもらった筈だ。

「そうだ。そう教えた。でも、お前達の世界ではの話であって、こちらの世界に来れば前世・来世であろうと特殊能力が使えるんだよ」
だから早く応戦しろ。
と言いながら、再び防御体勢に入る。

「水舞龍！水壁の舞！！」

「すいぶりゆう？」

「そう、水舞龍。唱えれば水龍が現れるから。さあ！唱えろ！！」

「てか最後の水壁の舞って何！」

「技の種類だよ！次は剣の舞だ！行くぞ！！」

「あつ、はい！」

思わず敬語になってしまった。

『水舞龍！剣の舞！』

唱えると、リヴィと棗の前に巨大な水龍が現れ、剣の様に鋭く変化し、亨とスティーの方向へ飛んで行った。
激しく砂を巻き上げ、必死に防御する亨とスティー！。

何でだよ・・・。

抵抗なんて無意味だろ？

何故お前はそちら側に居るんだ・・・？

亨

声なんか届く筈がない。

叫びすら悲痛の内に消えて行く。

すると直後で砂を巻き上げる音が聞こえた。
後方からの攻撃。

「やばっ！」

避けられない。

「片割れの翼 防」

それは突然の声によって防がれた。

「・・・ありがとな、ルシン」

「なんの」

微笑むルシン。

「あれがルシンさんの特殊能力？」

「そう。片割れの翼 防。防御専門の特殊能力だ。因みにルシナは片割れの翼 攻。攻撃専門だ」

凄い。

強い。

遠くでは柷達も闘っている。

柷は手から焰を放ち、柷は雷の鳳凰を操っている。

「柷は猛火。その名の通り。柷は雷鳥。雷の鳳凰を喚び出す事が出来る。」

柷の攻撃が亨とステイーに当たった。

「ッッ・・・！」

ドサツと鈍い音がして、二人が倒れる。

「ステイーラム・ハーツ及びに梶那 亨。貴方二人を拘束します」

以外と呆気無く闘いは終わりを迎えた。

すると気が抜けたのか、体から力が抜けて行く。

でも、何処か違和感がある。

それは言葉では言い表せない妙な感覚で、何かが腑に落ちない。

言わなければならぬ。

聞いて確かめねばならぬ。

「・・・二人はどうしてこんな事をしたんだ」

突然笑い出すステイー。

「フッ・・・クフフ・・・。どうしてかだってエ？なら教えてやるよ。佐倉 棗え！お前等が犯してきた罪を！！俺の」

一緒に亨も呟く。

『俺達二人の苦しみを……!!』

また逢える日まで

犯してきた罪とは一体どれ程のものであるかは計り知れない。
罪を犯した記憶も無い。

だが、二人の言葉が偽りではない事は分かる。

『青空の下、我行かん。行く先に親とて、既に有らず』

ステイーが口にした言葉。

圧迫感に苛まれる。

『紅蓮の砂漠は世界を紅く染め上げ、復讐へと誘う』

それでも未だに状況を飲み込めない。

「これがさあー、俺の親が死ぬ時に、俺に残した言葉だよ」

クスクスと不快な笑い声をあげる。

「どう言う意味が解るか？」

棗達は沈黙する。

「これはな、“この青い空の下をお前が何処まで歩いても、もう私達は居ない。血で紅に染まる砂漠を歩いて行けば、復讐の元へ導かれる。”って意味なんだよ」

“それで何処に辿り着いたと思う？”と尋ねる。

「リヴィ、お前の元だよ」

激しい動悸。

「まさ・・・か？」

「そう。お前の両親が俺の親父達を殺したんだよ？」

棗の心臓が潰れそうな程に鼓動打つ。

苦シイ。

息が出来ナイ。

デモ、コレデ全テガ繋がッタ。

「だから 俺の父さんと母さんを殺したのか？」

「そうだよ」

「何故町の人達まで傷つけた！何故！！」

「前からお前の事、大嫌いだったんだよ！だからお前に連なる者を、全て排除してやったんだ！それにアイツ等は全員政府機関の奴らだ！親父達を殺した、『Six road police』のな！いくら反政府組織だからって、殺されるような真似、してなかったのに！」

違う。

本当は違う筈だ！

分からないけれど、何かが違うんだ。

棗の心が激しく叫ぶ。

その時だった。

亨が涙を流したのは。

暫しの静寂が訪れ、世界は静まり返った。
リヴィも一呼吸置いて話し始める。

「なあ、ステイー。本当は・・・違うんじゃないのか？」

「何が・・・？」

「本当は怨みなんて無かったんじゃないのか？」

「いいや。怨みはあつたさ。『Six road police』
も憎くて堪らなかった！でも・・・でも！お前と・・・お前達と一緒に
いる事で、消えてしまいそうで恐かった！お前の両親や町の人に
優しくされる事で、出来ないって不安だった！失う事が恐くなった
！だからやるなら早くって・・・！！俺は憎まなければならぬ！
自分の親を殺した奴らを！！それはお前の親であっても同じだった。
・・・！だから・・・俺はやった」

「・・・俺はさ、理由を知ったからって許せるほど、器のデカ
い奴じゃないんだよ」

するとステイーは申し訳なさそうな、悲しそうな笑みを浮かべる。

「そうだな・・・。お前も同じだもんな・・・？でも知っておいて
欲しかった・・・」

「ステイー……ありがとな。それと……ごめん」

ステイーが首を横に振る。

「良いんだ……。最後に伝えられて良かった！本当にごめんな……。ありがと！！ずっと一緒に笑っていられたら良かったのにな……。！」

最後は涙しながらも笑顔だった。

きつとステイーはこれで満足だったんだ、と、棗は思った。
そうか。

だから……。

「だから亨も……」

「ではリヴィさん。棗さん。ステイラム・ハーツ及びに梶那 亨
を拘束します」

え……？

「とつ、亨も連れて行くんですか？何で亨まで？」

「ですが棗さん……。ステイラム・ハーツに連なる者は拘束しなければなりません」

「そんな……」

その時、口を閉ざしたままだった亨が、棗に歩み寄ってきた。

「棗……。多分こうなる事は必然だったんだよ？」

半分諦めたような瞳。

「だからって、お前が行く必要はないだろう!？」

スティーと同じように、亨は首を横に振った。

「これは俺の罪だ。それに例え今逃げたとしても、決して逃れられはしないだろう。だから俺は行くんだよ。俺の罪を償いに」

「ではそろそろ」

榊の言葉に足を進める二人。

その二人の前に、いつか見た時間断層が現れる。

「亨……」

もし……もしも俺達がこんな立場ではなかったら、ずっと一緒に友達でいられただろうか？

「亨! もう逢えないのか!？」

軽く微笑む亨。

「大丈夫。現世でも逢えたんだ。来世でも逢えるさ。だからさ、時を越えてまたいつか」

「亨っ!!」

遠くから水城も駆け寄って来た。

「亨行っちゃうつて・・・」

「なあ？水城。棗を宜しくな・・・。コイツは水城がいないと駄目だからさ」

「うん・・・！また逢える事、願ってる・・・」

最後に亨は満面の笑みを浮かべた。

「じゃあな！棗！」

涙か止め処なく溢れて来る。

「っ・・・」

「棗・・・終わりだよ。もう・・・終わった」

「リヴィ・・・ありがとう。でも・・・さ、お別れ言わなきゃ」

「そうだな・・・。行こう！」

今にも時間断層に消えて行きそうな二人の背中を追った。

「亨！」

「ステイー！！」

『またな！！』

二人も応えた。

『来世でまた逢おう!!!』

大丈夫だよ。

もう大丈夫。

歩いて行ける。

その後俺達は普通の生活に戻って行った。

長い期間彼方の世界にいたにも関わらずこっちの世界では入学式の次の日。

それからの月日が経つのは早く、いつの間にか卒業式を迎えた。

あの日から三年間。

亨の事を覚えている者は俺と水城以外には居なかった。

卒業式が終わってふと思い出す亨の姿。

「あーヤバい。俺泣きそー」

「どうしたの棗？卒業が悲しい？」

「いや、違くて。ただ・・・」

その時、声が聞こえた。

『また・・・な。棗』

アイツの姿が一瞬、見えた気がした。

「棗？」

ずっと・・・空を見つめていた。

「亨！またな！！！」

大声で青空に向かって叫ぶ。
思いつき笑い声が響いた。

それからいつか、何処かの中学校。

「いーおーり！」

そこに伊織いおりと呼ばれた少年がいた。

「何だよ愛めぐみ」

「えへへー。今日から中学生だね！」

「そうだな・・・ん？」

「どしたの？」

「いや、アイツは？」

「転校生だつてー。って伊織！？」

何かに引き寄せられるかのように、伊織は一人の少年の元へ向かった。

「なあ、君転校生なんだつて？良かったらさ、俺と友達になんねえ？」

振り向いた少年の顔を見て、一瞬懐かしいと言つつ感情が走った。

「亨……？」

「棗……！？」

二人で言葉にして、慌てて口を塞いだ。

「え！？あつ悪い！」

「いや！僕も……！」

「……あのさ、変だっと思って聞いにくんねえ？俺さ、君を見た時頭ん中で、“やっぱ俺と亨が出会ったのは、運命だったんだ”って声が聞こえたんだよな。……って思いつ切り変な奴みたいじゃんか！ごめん。今の忘れ」

「ううん。良いよ。僕もね、頭の中で声が聞こえたんだ。“久しぶりだね、棗”って。二人とも何処か可笑しいのかも知れないけど、でも聞こえたよ？」

「そっか。俺の名前は松永^{まつなが} 伊織。宜しく」

「僕は斉藤^{さいとう} 雨龍^{うりゅう}。雨龍って呼んで」

微笑んで握手をした。
ほうら、やっぱり。

『俺と亨が出会ったのは、運命だったんだ』

『久しぶりだね、棗』

『もうずっと友達で居られるな』

『ああ！ずっと一緒だ！』

聞こえた。

優しい声。

穏やかな会話。

「俺達、棗さんや亨さんみたいな親友になれると良いな！」

「そうだね！」

今度はずっと一緒だ！

\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$

『 貴方の周りにも、数々の輪廻があります。そして輪廻の輪とは永遠に続くもの。ですから今日も、何処かで廻り続けている運命があるかも知れません。ほら、貴方のすぐ隣でも、貴方に無関係な者など居ないのです。いつか私も、貴方にお会い出来る日が来るかも知れません。廻る運命の輪の中で。その時まで、暫しのお別れです。また逢える日まで』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6877l/>

輪廻～廻る運命の輪～

2010年10月14日12時04分発行